

夕暮れ時にきた客 沖縄本島北部における旧盆行事の現在

吉田佳世（追手門学院大学）

本発表は、沖縄本島北部のある集落で、旧盆行事中に発表者が遭遇したある出来事をもとに、現代沖縄社会の祖先祭祀について考察しようとするものである。それは、2009年の盆行事期間中（旧暦7月13日～15日）に私がインタビューに足しげく通っていた夫妻の家を訪れた女性についてのことである。

夫妻が住んでいる家はある門中の本家にあたる。当時、夫妻（ともに80代）が2人で住んでいた。この日は旧盆の最終日（ウークイ）ということもあり、夫妻に加え、長男夫妻、三男夫妻とその子どもたち、未婚の長女と次女が、一堂に会し、この家でウークイを過ごす予定であることを発表者は聞かされていた。しかし、発表者が訪れた時、家にいたのは夫妻と長女だけであった。皆、あいさつ回りや仕事、アルバイト、用事などで出かけており、また、夫妻と長女も来客の対応や馳走の準備で忙しくしていた。沖縄場合、旧盆期間中は、「あいさつ回り」と称して、家の代表者が中元の贈答品を携えて親族の家のヅツダンに手を合わせに行くということが行われる。多くの場合、3日間ある盆期間中の2日目（ナカヌヒー）に行われるものの、ウークイに訪れるシンセキもいる。この日は発表者が知る限り、2組の客がこの家を訪れていた。2組の客はどちらも子どもを連れていて、近況報告をしながら、夫妻の「カメーカメー攻撃（ご馳走を食べなさい、食べなさいという勧め）」を巧みにかわしていた。まだ数か所あいさつ回りに行かなければならなくなからだという。

夕方5時か6時ごろ、皆が集まった夜に食べる馳走や供物の準備も一通り終わり、来客の訪問も途絶え、夫妻と長女、発表者はお茶を飲んでいた。発表者があいさつ回りの客はもう来ないのかと聞くと、「多分、もう来ないだろう」とのことだった。妻や長女にとってはつかの間の休息だったはずである。西日が差していく、遠くからはエイサーの太鼓の音が聞こえていたが、とても静かな時間だった。その時、50代ぐらいの女性が、玄関を開けて入ってきた。発表者にはその女性が先に訪れた子ども連れの来客とは明らかに異質にみえた。それは夫妻が彼女の訪問を予想していなかったということもあるが、先の2組の来客が中元を用意して、家の代表者として足を運んでいるのに比して、あまりにも「ふと来てしまった」というような様子だったからである。後に夫妻に尋ねたところ、彼女は夫妻からみて、夫の父方イトコの息子の娘にあたる人物であった。彼女の両親が離婚したこともあり、

彼女と父との関わりが薄くなるとともに、夫妻とも長らく交流が途絶えていたという。

彼女の来訪に、夫妻は驚きながらも喜び、彼女を迎えた。彼女は中元の贈答品ではなく、お金が入っているであろう小さな封筒をヅツダンに供え、線香に火をつけ、手を合わせた。そして、「実家やムートウヤにずっと手を合わせていないのが気になって仕方なかった。だから、思わず車を走らせてきました。今は結婚して中部に住んでいる。これから急いで戻ってウークイの準備をしないと」というと、夫妻と少し話をしてやはりすぐに帰っていました。

以上が発表者が旧盆行事で遭遇した出来事である。もしかすると、これを読んだ人の中には、ありふれた出来事だと思う方もおられるかもしれない。しかし、改めて筆者がこの出来事を思い返すと、この出来事は、現代沖縄の門中、祖先祭祀の実態を如実に映し出しているように思われてならないのである。それは、アットホームなものとしてイメージされやすい旧盆行事が実は、役割分担が明確になされた個人単位での活動が多い行事であることを映し出しているということもそうである。また、「おもな機能は祖先祭祀である」〔比嘉 1983〕父系出自集団・門中が、現代化のなかで後景化していること、それでも個人の私的な行動によって門中の輪郭が人々に再び意識され、炙り出されるということもそうである。本発表では、特に後者の点に注目し、女性の県内移動に関する変化を踏まえながら、そこに関わる現代沖縄社会の祖先祭祀における女性の役割について考察していきたい。

参照文献

比嘉政夫 1983 「門中」『沖縄大百科事典』下、沖縄タイムス社。

キーワード 祖先祭祀、沖縄、父系出自集団、盆、女性の役割